

言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 林 初梅
論 文 題 目 台湾における郷土教育思潮とアイデンティティ形成
—郷土観・歴史観・言語観の模索—
論文指導委員 松永 正義教授
学位取得年月日 2007年9月28日

1990年代以降、台湾では郷土教育が盛んに提唱された。本論文は、その郷土教育の進行の具体相を明らかにし、台湾の社会における国民統合のあり方との関連から分析を加えようとするものである。研究の対象は1990年代以降の郷土教育であるが、1990年代の郷土教育との接点を理解するため、取り上げた時代は日本統治時期から現時点まで長い期間にわたった。

郷土教育とは郷土の自然や生活、文化を教材とすることによって教授・学習を直観化、経験化するとともに、郷土愛ひいては国家愛を育てることを目的とする教育であると考えられる。言い換えれば、郷土すなわち身近な生活の場に教材を発見し、それを授業に利用するという教育方法に重点がおかれるが、状況によって、愛郷心愛国心の涵養を目的とする郷土教育にもなりうる。近年、世界各国の社会科教育で郷土が取り上げられ、郷土の生活・自然を教えることが1つの潮流となっているが、現今の台湾においては、地域に即して行われるにとどまらず、歴史教育と言語教育の側面を持ち、ナショナル・アイデンティティの創出・維持又は強化という機能をもっていると私は捉えている。

私は1990年代台湾の郷土教育が国民統合の創出のために巧みに利用されたこと一方で着目しながらも、中央政府が郷土科教科設置による民間運動を取り込むという実施過程を通じて、台湾社会における言語観や歴史観の編成替えが行われているという側面を注目する。言語教育と歴史教育は国民意識を形作っていくための大切な要因だと一般に考えられてきたが、台湾の郷土教育の場合は、言語と歴史教育を主要な内容として含みながら、教育内容が中央政府による価値観の統制なしに自主的に展開されており、そのため、自らのアイデンティティが模索されつつある、という状況が現在進行中である。私はそのような状況に注目しており、多様な地域文化とエスニシティが取り込まれる郷土教育が、台湾

への求心力をどのように促進強化するのか、そして「国民国家」へ向かう国民統合の可能性がどのように寄与していくのかを明らかにしてゆきたいと考えている。

以上のような問題意識を持ちつつ、私は台湾の郷土教育を、教育施策と民間運動との関わりの中で追跡し、把握し、アイデンティティ形成の視点から論じた。その結論として、私は、90年代の台湾の郷土教育に示された形成過程そして意味内容の概要を次のように2項目に整理した。

1. 運動としての郷土教育に顕著な特徴は台湾ナショナル・アイデンティティへの追求である。その一方で、政策としての郷土教育はむしろ、文化的多元主義 (cultural pluralism) 指向の傾向が強いと、私は観察している。

運動次元のレベルは、中国化教育の内容への対抗の文脈で形成されてきたという特徴を持ち、台湾史と台湾語の構想を以て従来の中国化教育を改造して展開しようとした。郷土教育の底流には、郷土からまっすぐに国家へと繋がっていく形があり、台湾ナショナル・アイデンティティの一体性の形成が強く期待されている側面があると捉えられる。

しかし、郷土教育が1994年に国家全体の教育体制の中へ編入された後、研究者、運動者から現場教師、民間人まで、多くの知識人が積極的に関与してきたため、そのような理念の郷土教育は、学校教育の教科設置につれ、やや異質なものへと変貌していた。結果として、郷土文化教材は、台湾の多様性を提起しつつ、同時に台湾の人々が共有している郷土地域に根ざした文化や歴史的経験をも次世代へ伝えようとする特徴が現れている。現在の台湾の郷土教育の展開の様子から見て取れるのは、多くの様々なエスニック集団の文化的・歴史的経験を広く共有することによって、台湾社会がより豊になろうとしていることである。現在の台湾はそのような結合力のある社会を支持し発展させる「多からなる一つへ」すなわち、多元的な統合を目指すという価値を探し当てたという状況になる。

2. 台湾の郷土教育は、中央政府の主導によるというよりも、民主的な制度のもとで自発的同意に基づいて推進されたため、郷土観、歴史観、言語観をめぐる論争がかなり自由に展開され、その中で生じた競い合いそのものが台湾の郷土教育の表現を形作ってきたと捉えられる。その展開は、行政運営の組織に限れば、中央政府の管理が支配的になったといえるが、教育内容についてはヘゲモニーを行使する主体は中央政府ではなく、地方政府でもなく、知識人の活動の中にあった。その結果、郷土教育は様々な葛藤や調整を経ながら

展開され、郷土教育の実施内容に関する国民全体の合意が形成されつつあると捉えられる。

現在、台湾社会では、郷土意識による共同体という理念や文化的多元主義などの新しい統合原理が模索されている。郷土教育運動は、その模索の過程において、台湾人アイデンティティの多元性を深化させている。異質な存在を許して、多元性を求めつつ統合の方向を探る原則は、大きな紛争を生じさせない仕組みの一つであった。台湾の郷土教育は現在、その内部に大きな不整合を抱えながらも、国民的合意の形成に役割を果たしているといえる。

本論文は以上のことを論ずるために、四部からなる構成をとった。各部は以下のような内容である。

【第Ⅰ部 記憶の中の郷土教育】

台湾では郷土教育はすでに日本統治時代に実施された経験があり、戦後、国民党政権の支配下に入った1945年以降も郷土教育が提起され、しかし、いずれにおいても「郷土」の空間に日本や中国という、より上位のスケールに接続される回路もまた同時に構築されていた。台湾という「郷土」はあくまでも国に対しての一地方であり、「国土」の周縁に位置づけられていたのである。その郷土観とは、すなわち、祖国へと拡大する同心円的構造、つまり、外延的意義の郷土観が潜むものであった。しかし、それらは脱構築されて1990年代の郷土教育に影響を与えたといっただけではないか、と私は考えている。私は以下のようなプロセスを明らかにしてきた。

日本統治時代の流れは、しばしば九〇年代以降の郷土教育に結びつけられ、郷土教育の先駆であったという理解が提起されてきた。日本統治時代の郷土教育の特徴の一つは、郷土を生徒の生活領域として表象することであり、郷土室の設置、郷土調査や郷土読本の作品は、その殆どが地域色の濃いものであったことに価値が認められたからである。

1990年代に創出された郷土教育のモデルには、日本統治時代の郷土教育と共通した側面がいくつかあった。一つは、生活領域を中心とした「郷土の認識」に立つものとなった点であり、いまひとつは、「郷土の近代性」の提起という点であった。

勿論、植民地時代の郷土読本に現れていた「郷土の認識」「郷土の近代」の二点は、戦後の抗日戦争が核心となった歴史観と全く対照的で、そのままの形で90年代の郷土教材に踏襲されたとは考えにくい。しかし、過去の「郷土の認識」の成果が1990年代の台湾人に、台湾の現実の姿を再認識させることに結びついたのである。そして、「郷土の近

代」という点は中国と異なる台湾社会の独自性・特殊性を主張する論拠として提起されるようになり、台湾の資産としても認識されるようになった。

日本統治時代の郷土教育は、郷土への教育とともに、国家への教育が意図されていたが、「郷土の認識」、「郷土の近代」という特徴が、逆説的に台湾の色彩を抹消せず、今日の台湾人を引きつけたのである。すなわち、虚像の日本人アイデンティティに包摂されながらも、生活領域の郷土に根ざしている台湾人アイデンティティが同時に形成され始めたと考えられる。

その一方、中（華民）国化教育時期の郷土教育論は、台湾各地の地域性・特殊性に触れず、広大な郷土は中国であり、そのことを前提として全教科を郷土化すると主張するものであった。

郷土教育は1945年から1990年代までは、正式に教科設置を与えられておらず、常識科、社会科、自然科教育などで提起されていた。それらの「課程標準」による郷土の提起は90年代に入ってから、条文上のものに過ぎないと指摘されたが、『台湾郷土教育論』（1950）の主張に沿って解釈すれば、郷土科が独立教科として設置されなかったことは、全教科を郷土化（中国化）するということだったと理解できる。しかし、その郷土教育では、台湾という郷土空間は、あくまでも中国の一部であり、心の向かう先は広大な郷土としての中国であり、中国への祖国愛の養成こそ、その郷土教育の狙いであった。郷土教育を通して台湾の人々を祖国のアイデンティティを持たせようとしたことは一見して日本統治時代の郷土教育と同様にみえるが、その郷土は、台湾人の住む土地の現実に根ざした郷土とは異質のものであった。むしろ、台湾の現実子ども達に隠されたような状態となり、そのことが90年代に入り、批判の焦点となり、郷土教育の中断期と位置づけられた。

ただし、九〇年代以降の郷土教育にとって、ある種ねじれた意義があったともいえる。それは、本論にとって重要なことだが、郷土に関する「課程標準」の条文の存在が、郷土教育教科設置を許容させ、さらには促した一因だったとも言えるからである。

【第Ⅱ部 郷土教育の形成の場】

1990年代に入って盛んになった郷土教育は、以上に示された二つの郷土観とは非常に異なる点を持っていた。それは台湾内部の地域社会を郷土として教えるものにとどまらず、台湾全体という広い地域も教えるものであり、主体性を持つものとして台湾教育史上

重要な位置づけを占めるものであった。そのような郷土教育が行われる第一の契機は、1970年代から、運動者と研究者を含んだ知識人による本土化理論模索の活動であり、第二の契機は1990年頃、地方政府が母語教育と郷土文化教材編集を手段として、中華アイデンティティと結び付いている中央政府ヘゲモニーの固い壁に挑んでいた対立構図の確立であった。第Ⅱ部では、郷土教育が登場するまでの1970年代から1990年代初期にかけての台湾の社会背景について概観し、さらに郷土教育の発生原因と教科の特設へと向かう経緯を考察した。その結果、私は以下のようなプロセスを明らかにしてきた。

1970年代の台湾社会は、土着理論などが知識人によって提起された一方、郷土文学という動きが物語るように、次第に台湾という郷土を意識化するようになった。その際、文学作品で郷土台湾を題材とするのみならず、台湾語を使用するという試みも始まった。

1980年代の台湾社会では、台湾意識の高まっている中で、中国との異質性を目指す主張・運動が様々な形で行われていた。例えば、母語文化復興（台湾語意識、台湾語文学、台湾語文字規範化）と歴史認識の再構築（台湾の土着性、日本統治による近代化の提起）などがそれであった。そうした動きは、台湾の知識人による本土化理論の模索の一環であったと理解でき、また、いずれも中国と異なる台湾社会の独自性・特殊性を主張する論拠として提起されたものであった。しかし、それらの主張には、台湾の独自性・特殊性を強調する特徴を備えているという高い同質性を示す一方で、排他性も現れていた。台湾語運動は中国語への抵抗だけではなく、マジョリティの閩南語に力点が置かれ、閩南文化へ傾斜する側面が強調されていたのである。そのような状況を克服する形で現れたのが「郷土」という語を冠した教育であった。1980年代の郷土教育は、画一的な中国的教育内容からの離脱だけではなく、同時に台湾内部の差異性を包摂する動きを醸成していたと捉えられる。

1990年代に入り、台湾人の台湾語の主張と本土文化の自覚とは、論壇での議論から、具体的な実施に転じ始めた。そのような変貌は、立法院での本土化教育の議論、また、一部の地方政府による本土化教育の実施を伴うものであった。1990年代の初期の基本的な姿は郷土補充教材の編集と母語教育への関心であり、民進党系地方政府は母語教育或いはバイリンガル教育を強調し、国民党系地方政府は主に郷土文化教材の編集のみを行った。総じて見れば、地方政府と立法院の両者による本土化教育の展開と議論は、中央政府の教育行政の過程に影響し、その結果、郷土教育はまず教科外の指導活動の形で小中学校教育に取り入れられ、そして独立教科として設置されるに至ったのである。

つまり、郷土教育教科設置の背景には、郷土文学運動から発した台湾語、台湾史及び台湾文化に関する知識人の関心があり、それらがまず地方レベルで学校教育に反映し、さらに中央政府のレベルに持ち上がったと捉えられる。

【第Ⅲ部 郷土科時代】

1994年以降、中央政府は上から制度的に郷土教育を創出・確立しようとするようになった。「郷土教学活動」「郷土芸術活動」「認識台湾」三教科設置の「課程標準」のほか、中央政府の具体的な施策に、1995年の教育部による郷土教育実施要点の公布があった。それは2001年の九年一貫新課程の実施に至るまで学校現実の郷土教育を最も強力的に促進するものとなった。

第Ⅲ部は郷土教育設置以降の展開と問題点を考察したものである。「郷土」は様々なイデオロギー的洗礼を受けて生まれた概念であった。郷土教育三教科の特別設置は、郷土の定義をめぐる論争を引き起こすことになったにもかかわらず、却って従来中国に偏っていた教育内容を是正することにつながっていった。多くの論者は同心円理論の曖昧さを抵抗しながらも、受容しようとする姿勢を示し、拡大された郷土意識としてのネーションは論者が自分なり解釈するようになったのである。それは「郷土」と「国土」に対する定義が異なり、コンセンサスが十分でないことから生じたことであつたが、それが却って、教育現場では立場を異にした人たちが同じく台湾の地域社会に即して郷土教育を推進するという状況を生み出した。論者の間に一種の「異心同体」とでもいいうる状況が生まれたのであつた。

1990年代の郷土科時代は、台湾についての具体的な記述が大幅に増えた時期であつた。地域の郷土文化教材、郷土科教科書が多数作られるとともに、従来と著しく異なる歴史観を持つ中学校教科書『認識台湾』が発行された。教材の地域的な多様性と編集上の自由度はこの台湾の郷土教育の大きな特徴であるが、新しい教材には歴史を書き直す動きが現れた。新しい教材によって台湾主体の歴史観が提起され、しかも統合的なイメージへ移行していくことになった権威主義体制下の「正統中華民国史観」と関連している中華アイデンティティから、「台湾史観」と深く関連する台湾主体のアイデンティティへと徐々に移行しているのが現在の台湾である。台湾の郷土教育の底流には、郷土からまっすぐに国家へとつながっていく形があり、国民形成としての教育の側面があると考えられる。

その一方、小地域を中心とする小学校の郷土教材は、台湾における多様な郷土文化とエ

スニック文化が取り込まれる新しいアイデンティティの構築につながるものであり、郷土教育は、地域社会の基盤を強化する側面をもっている。単一の均質的なアイデンティティへの凝集力ではなく、むしろ脱中心的な多元性を持つアイデンティティへの移行が進行することになった。すなわち、「多元文化主義の台湾」という試みが、逆説的に台湾への求心力を維持・促進しているといえるだろう。なぜなら、多元的・多文化的ということ自体が「多」で構成される全体としての台湾を強調することにつながり、台湾において単一の価値観を指向する中華アイデンティティとの相違が一層強調されるようになるからである。

1970年代以来、台湾の知識人の追求した本土化教育は、90年代の郷土教育の3教科設置を通して広く台湾全体のレベルで実現に至ったといえよう。ただ、発音記号と文字化をめぐる対立は克服されず、一連の論争は、当時軌道に乗るかにみえた郷土言語教育に、困難と停滞とをもたらした。郷土言語教育は、郷土史、郷土文化とともに教えることが目指されたが、進展はかなり遅れている。そうした実践を経ながら、問題として焦点化されたのは、①中国人アイデンティティと台湾人アイデンティティという「国民純化」の図式だけではなく、②台湾内部の諸言語間（エスニック集団の競い合い）のイデオロギー対立の図式、及び③台湾語推進者の主張する「望ましい台湾語」の相互間の対立の図式であった。

特に困難が多く解決のみを押しが見えないのが③の言語規範化の問題である。発音記号の整備は、90年代以降、学習手段としての規範化が強く望まれるようになった。台湾語教育の推進団体が自らの提案を主張した結果、いくつもの発音の表記法が林立し、長期にわたる対立が生まれた。マジョリティの閩南語を例とすれば、現在、学校教育の中で有力な発音記号の表記法としては、方音符号と三種類のローマ字（TLPA、通用拼音、教会ローマ字）があげられる。そしてまた、書記言語として、漢字を志向するTLPA論者、漢羅文を志向する通用拼音論者、最終的に全文ローマ字を志向する教会ローマ字論者には、目指す方向にも対立構造が存在した。そのような発音記号と文字表記をめぐる対立、論争の展開は、国民国家形成過程における「言語の独立」への展開が再現される一段階にあると見ることができ、また、台湾語の自立性を確立する過程で遭遇しなければならない「揺らぎ」を示しているものでもあると捉えられる。

【第IV部 九年一貫課程による郷土教育の新しい展開】

郷土言語教育が郷土教育の中心的な課題となったのは、2001年に九年一貫新課程が

正式に実施されて後のことである。2001年以降の九年一貫新課程は、郷土言語の必修化と全教科の郷土化を理念とするもので、それをを反映している。その実施に伴い、郷土言語教育が郷土文化教材に代わる中心的な問題となった。同時に、台湾史、台湾地理の導入も進み、社会学習領域（社会科）教育の内容の郷土化が進行したと特徴づけることができる。最後の第Ⅳ部は、郷土科時代に生じた台湾主体の歴史観が、現在、どのように変容しつつあるのか、そして、郷土言語教育は九年一貫新課程の下でどのように推進されてきたのかという現在進行中の展開を検討したものである。

郷土言語教育では、教育現場が一連の言語論争に対して、実際にどのように呼応しているか、中央政府の行政運営がどのように機能していくのか、そして郷土言語教育の内容が1つの方向へ収束していくのか、ということが焦点である。具体例として、取り上げた台北市の取り組みは学校のカリキュラムに正規の位置づけをもつということが如何に大きな出来事であるかを如実に示すものである。その例などを通して、多様であった地域の教育内容が中央政府に統御されているかどうかを考察し、そこから郷土言語教育はどのような文脈において推進されているかを探ってみた。その結果、郷土科時代と異なり、台湾の諸言語を「本国語文」の一環として提示したことは、各エスニック集団の言語を国語と並列に位置づけようとした試みでもあったが、「郷土言語」という概念の方が教育現場で広く受け入れられている現実があった。また、文字化と発音システムに関する論争は、その議論がますます深化し、また拡大したが、郷土言語教育の行政運営は、ほぼそれ以前の郷土科時代の流れを継承したものとなっている。現在は、そのため、行政組織の編成や教師養成のパイプラインが速やかに機能し、台湾諸言語の言語的地位は大幅に上昇し、郷土言語という概念も教育現場で定着するに至っていることが確認できる。

その一方、2001年以降、従来歴史、地理、公民は統合されて、社会学習領域となり、台湾史はその中に位置付くことになった。新しい教科書の歴史部分に描き出された台湾史は『認識台湾』との間に著しい近似性を示していることにより、台湾人アイデンティティの確立と深く関連する台湾主体の歴史観は、一定の方向性を堅持していると捉えることができる。すなわち、1990年代の郷土科時代との間に連続性と一貫性が明瞭で、台湾史教育は1990年代郷土科時代の展開期から現在「確立期」を迎えていると理解できる。

今日の郷土教育は、歴史観が1つの方向に定まりつつあることを示すとともに、言語の方ではなお、多元性を確認しているような状態にある。本論文は、それらを一望に見て、

郷土教育が多元性にして統合性のある新しい新しい台湾社会を形成する役割を担っている
ことを見出したものである。